■第２章－概説■

用明天皇の即位から推古天皇が亡くなるまでの約４０年間、蘇我氏の血筋の王権が続きました。

推古天皇の次に即位した舒明（じょめい）天皇は、非蘇我系の敏達（びだつ）天皇の孫にあたります。

639 年、舒明天皇は百済川（くだらがわ）ほとりで新しい王宮と寺の造営を始めました。百済は、奈良県桜井市の磐余（いわれ）に比定されています。

また、宮殿と寺がセットで造営される構図は、上宮王家（じょうぐうおうけ）の斑鳩宮（いかるがのみや）と法隆寺若草伽藍（わかくさがらん）を模倣した、とも考えられます。

舒明天皇は、蘇我氏の本拠地である飛鳥から離れた天皇家伝統の地で、中央集権国家の基礎を築こうとしたのでしょう。

その百済大寺（くだらのおおでら）の有力候補が、巨大な金堂と九重塔の基壇跡が発見された吉備池廃寺（きびいけはいじ）です。

舒明天皇の崩御後、その造営は、皇后で次に即位した皇極（こうぎょく）天皇に引き継がれました。

皇極天皇が即位した頃、唐の軍事的圧力により朝鮮三国それぞれで政変が起きていました。

緊迫する隣国情勢に呼応し、国内でも大きな政変が起きました。

645 年に起きた、中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）と中臣鎌足（なかとみのかまたり）によって、蘇我蝦夷（そがのえみし）・入鹿（いるか）父子が殺害された乙巳（いっし）の変です。

変後、孝徳（こうとく）天皇が即位し、年号を大化と定め、同年 12 月には都を難波に遷しました。

翌年正月には、大化改新の詔が発せられ、政治改革が進められていきました。

難波長柄豊碕宮（なにわながらとよさきのみや）に遷都した孝徳天皇は、仏教を篤く信仰したといわれています。

648 年、大化の改新政権の左大臣、阿倍内麻呂（または倉梯麻呂（くらはしまろ））によって、四天王寺の五重塔内が荘厳（しょうごん）されたと日本書紀にあるように、この頃、難波宮の官寺（国家の寺）として、四天王寺の整備が進められたことがわかります。

また、難波宮は仏教行事を宮内で行った最初の王宮で、蘇我氏から始まった氏族仏教を、国家仏教へと成熟させることを目指した孝徳天皇の意思が表れています。

舒明天皇の甥にあたる孝徳天皇は、中央集権国家を目指した舒明天皇の遺志を継ぎ、難波宮と四天王寺の整備を進めたのです。